

## 「キルギスを訪れて」

村松 奈津子

中央アジアにあるキルギス共和国の首都、ビシュケクから車で 6 時間、夫と私が娘なぎさの住むアルシュ村に着いたのは 2010 年 3 月 25 日のことでした。3000m 級の真っ白な山々に囲まれた人口 400 人あまりの小さな村です。娘は青年海外協力隊の一員として昨年 9 月に派遣され、ジャーマツトという女性だけの織物の組織の管理、運営に当たっています。

アルシュ村はキルギスの他の地域と同じく、ほとんどが牧畜を生活の糧としています。娘のホストファミリーもたくさんの羊や牛、鶏を育てています。娘の家族は父親のアマントル、小学校の先生をしながらジャーマツトの 1 人として織物をしている母親のグルシャール、13 歳の長女グルジャズ、10 歳の長男ベグヌルの 4 人と、1 匹の犬です。



アルシュ村の入口

(キルギス語でアルシュ村と書いてあります。)



羊を追う村人

イスラム教徒が多いキルギスでは、羊は主たる家畜です。特別な時は羊一頭を解体し、皆で食べるのだそうです。アマントル家では私たちを迎えた翌日、その特別な料理で私たちをもてなしてくれました。

3月下旬だというのに、軒にはまだ氷柱が下がる朝、村の男性 3 人が納屋に集まりました。私たちもおそろおそろ納屋に入ると、納屋の中では羊がおとなしく縄につながれていました。男性たちは羊を囲んで座り、ナイフを持った 1 人が羊を抱きかかえました。空気が止まったかに思えたその瞬間に羊は横たわり、もう 1 人が羊の頭を持ち上げてすばやく血抜きを始めました。その後、男性たちはナイフで毛をはぎ、あっというまに羊は丸裸、一滴の血も流れず、羊も一声もあげません。見事というほかありません。触ってごらんとする、村人の言葉に従いそっと手を添えました。とても温かい羊の体でした。そして、敷物のような羊毛の上で、羊のお腹は一直線に切られました。標本のように並んだ内蔵を男たちがていねいに切り取っていきます。かたわらでは、母親のグルシャールと娘のグルジャズが、取り出した腸にお湯を何回も通しています。これで、詰め物をつくるそうです。納屋の外

では、飼い犬のタロがトレイにそそがれた血が固まるのをじっと待っています。これはタロのいちばんのご馳走なのです。頭はバーナーで焼かれ、大鍋で羊肉をゆでているかまどの上に置かれました。残りの肉は保存用に干されています。この屠殺、解体に立会い、私は不思議な気持ちを持ちました。残酷だとか、かわいそうというのではなく、羊一頭の命を頂く、この屠殺の儀式に感動さえ感じたのです。

夕食の準備が出来、居間の床におかれた塩茹での羊肉を囲んで座ります。まわってきた水で手を洗い、父、アマントルが両手をかかげ、祈りの言葉を言います。私たちもそれになります。まず、ウォッカで乾杯。その後、羊肉を食べ始めます。3時間もゆでられた羊肉はとても柔らかく、臭みは全くありません。そしてまたウォッカがつがれ、夫が挨拶をし、乾杯。次は私と、乾杯は延々と続きます。ゆで汁のスープ、腸詰、細切れ肉添えキルギス風パスタ。今夜は羊肉のオンパレードです。ナイフを上手く使えない私たちの横で、10歳のベグヌルは真っ白になった骨をまだナイフで削って食べていました。



羊肉を切り分ける、家長アマントル



牛糞を斧で砕く、長男ベグヌル

アルシュ村では、ほとんどが手作りです。牛の乳で作るバターやヨーグルト、毎日焼くパン、木苺のジャム、どれもとてもおいしいのです。村の女性たちは自分たちの手で作る全ての物を誇りに思っているようでした。娘の家は父親のアマントルがレンガや、石、木材で作上げた家です。家の中はシュルダックという、羊の毛で織られた鮮やかな絨毯が床に敷かれ、壁にもかかっています。我々が訪れた3月はまだマイナス10度、あたりは雪で真っ白でしたが、家にはペチカがあり、それを通してパイプがあるため、家全体が暖かく快適でした。燃料は牛糞を乾燥させたもので、毎朝ベグヌルが斧で砕き、ペチカにくべていました。ペチカの上ではお湯が沸いています。水は村に何箇所かにある井戸から汲み、それを全ての生活に使っています。ある朝、私が井戸に行くと、10歳くらいの男の子が、弟が乗るロバの背中に水桶を2つくりつけていました。6歳くらいの弟はロバに乗り、ぼっくり、ぼっくり家に向かって行きました。その様子がなんともどかで、微笑ましく、忘れられません。このようにして運ぶ水はとても貴重です。私も毎朝、コップ1杯の水で歯磨き、顔洗いをしました。

お風呂も面白いものでした。昔の日本のように「かまど」でお湯を沸かします。しかし限られた水なので、熱湯にしてバケツの水と混ぜ、行水のようにして体を洗います。お風呂場は外にあり、かまどと洗い場の 2 つの部屋があります。かまどで沸かした熱湯から出る湯気で小さな洗い場は熱く、まるでサウナのようです。冬はマイナス 30 度になるこの村の楽しみのひとつでもあるようです。

村のトイレ（これももちろん、手作り）といえれば不思議です。畑の中にあり、板塀と屋根の小さなものです。中には 30 センチくらいにひし形にあけた穴があります。汲み取り口はなく、汲み取っている様子もないのですが、臭いはありません。いつの間にか畑にしみこむのでしょうか？ 明るい昼に穴を覗き込むと、それはとても大きなものでした。夜はとても寒く、懐中電灯を持って行くのですから大変でした。途中、満天の星に見とれていると足は泥の中にズブッと入ります。雪解けの始まった庭はぬかるみ、娘がくるぶしまである靴で行くようにと言った理由がわかりました。

日本人は娘 1 人、両親が訪ねて来たのも初めてだというアルシュ村の人たちは、私たちを暖かく迎えてくれました。キルギスでは、お客様は「コノコ」と呼ばれ、幸せを運んでくるといわれているそうです。娘のホストファミリー、連日お茶に招待してくれた村人達に感謝の気持ちでいっぱいです。旧ソビエト連邦だったキルギスは英語がほとんど通じず、キルギス語とロシア語の国です。その国で、私たちは本当に興味深い異文化体験をし、人の手によって成り立っている暖かい生活も体験することができました。



共同井戸から水を運ぶ少年



村の女性と楽しいお茶の時間

私たちが帰国した数日後、キルギスでは政権崩壊が起きました。暴動のニュースが日本でも流れました。私たちが訪れた首都ビシュケクの町に炎が上がり、民衆と警察の衝突の映像を見て本当に驚きました。さらに南部の国境地域では、キルギスとウズベキスタンの民族抗争が激化し、多数の死傷者がでました。6月27日には国民投票が行われ、暫定政府と憲法改正案が承認されたといえます。外出禁止令が出ていた娘たちはやっと自由に歩けるようになり、仕事に戻りました。まだまだ、前途多難でしょうが、早く平和が戻り、キルギスに明るい未来が来るよう願っています。